「む、、十九日〳〵、」と、氣乘がしたやうに重ね返事、不圖心付いた事あつて、
「然うだ、待ちなせえ、今日は十九日と、」
五助は身を捻つて、心覺、後ざまに棚なる小箱の上から、取下した分厚な一綴の註文帳。
膝の上で、びたりと二つに割つて開け、ばら〳〵と小口を返して、指の尖でずッと一わたり、
目金で見通すと、
「然う〳〵〳〵、」といつて仰向いて、掌で帳面をたゝくこと二三度す。
作平もしよぼ〳〵とある目で覗きながら、
「日切の仕事かい。」
「何、急ぐのぢやあねえけれど、今日中に一挺私が氣で研いで進ぜたいのがあつたのよ、つい話
にかまけて忘れうとしたい、まあ、
「其は邪魔をして氣の毒な。」
「飛んでもねえ、緩りしてくんねえ。何さ、實はお前、聞いて居なすつたか、其の今日だ。此の
十九日にやあ一日仕事を休むんだが、休むについてよ、恁う水を更めて、砥石を洗つて、こゝで
一挺念入といふのがあるのさ、
「氣に入つたあつらへかの。」

「む、、今其處へ行きなすつた、彼の二上屋の寮が、」
と向うの路地を指した。
「あ、あ、彼だ、紅梅が見えるだらう、彼處に其のお若さんてつて十八になるのが居て、何だ、
旦那の大の祕藏女さ。
そりや見せたいやうな容色だぜ、寮は近頃出來たんで、矢張女郎屋の內證で育つたもんだが、
人は氏よりといふけれど、作平さん、然うばかりぢやあ無えね。
お蔭で命を助かつた位な施を受けてるのが幾干もあら。
藤三郎父親が又夢中になつて可愛がるだ。
少姐の袖に縋りや、抱へられてる妓衆の證文も、其場で煙になりかねない勢だけれど、其處が
方便、內に居るお勝なんざ、よく知つてていふけれど、女郎衆なんといふ者は、ハテ凡人にやあ
分らねえわ。お若さんの容色が佳いから天窓を下げるのが口惜いとよ。
私あ鑢一文世話になつたんぢやあねえけれど、そんなこんなでお前、其の少姐が大の贔屓。
何うだい、恁う聞きやあお前だつて贔屓にしざあなるめえ。死んだ田之助そツくりだあな。」

「處で御註文を格別の扱だ。今日だけは他の剃刀を研がねえからね、仕事と謂や、内ぢやあ商賣人のものばかりといふもんだに因つて、一番不淨除の別火にして、お若さんのを研がうと思つて。

うつかりして居たが、一挺來て居たと謂ふもんだ、何時でも恁うさ。

一體十九日の紛失一件は、何うも廓にこだはつてるに違えねえ。祟るのは妓衆なんだからね、少姐なんざ、遊女ぢやあなし、然も廓内に居るんぢやあねえから構ふめえと思つてよ。

まあ何にしろ變な譯さ。今に見ねえ、今日も屹と誰方か取りにござる。いや作平さん、狐千年を經れば怪をなす、私が剃刀研なんざ、商賣往來にも目立たねえ古物だからね、こんな場所がらぢやアあるし、魔がさすと見えます。

然ういやあ作平さん、お前さんの鏡研も時代なものさ、お互に久しいものだが、何うだ、御無事かね。二階から白井權八の顏でもうつりませんかい。」

其の箱と盥とを荷つた、痩さらぼひたる作平は、蓋し江戸市中世渡ぐさに俤を殘した、鏡を研いで活業とする爺であつた。

淋しげに頷いて、

「處がもし御同樣ぢやで、」

「御同樣!?」と五助は日脚を見て仕事に懸る氣、寮の美人の剃刀を研ぐ氣であらう。桶の中で砥

石を洗ひながら、慌てたやうに謂返した。

「御同樣は氣がねえぜ、お前の方にも曰があるかい。」

「ある段か、お前さん。恁ういうては何ぢやけれど、田町の剃刀研、私は廣德寺前を右へ寄つて、稻荷町の鏡研、自分達が早や變化の類ぢや、へゝゝへゝ。」と薄笑。

「おや〳〵、汝から名乘る奴もねえもんだ。」と、かつちり、つら〳〵と石を合せる。

「ぢやがお前、東京と代が替つて、此方等は宛で死んだ江戸のお位牌の姿ぢやわ、羅宇屋の方は未だ開けたのが出來たけれど、最う貍穴の狸、梅暮里の鰌などと同一ぢやて。其癖職人繪合せの一枚刷にや、烏帽子素袍を着て出ようといふのぢや。

「其だけに尙ほ罪が重いわ。」

「萬更其の祟に因緣のないことも無いのぢや、時に十九日の。」

「何か剃刀の失せるに就いてか、」

「つい四五日前、町内の差配人さんが、前の溝川の橋を渡つて、蔀を下した薄暗い店さきへ、顏を出さしつたわ。はて、店賃の御催促。萬年町の緣の下へ引越すにも、尨犬に渡をつけんことにやあなりませぬ、其が早や出來ませぬ仕誼、一刻も猶豫ならぬ立退けでござりませう。其の儀ならば後とは申しませぬ、唯た今川ン中へ引越しますと謂うたらば。

差配さん苦笑をして、狸爺め、濁酒に喰ひ醉つて、千鳥足で歸つて來たとて、棧橋を踏外さうといふ風かい。溝店のお祖師樣と兄弟分だ、少い内から泥濘へ踏込んだ驗のない己だ、と、手前太平樂を並べる癖に。

御意でござります。

何處まで始末に了へねえか數が知れねえ。可いや、地尻の番太と手前とは、己が芥子坊主の時分から居てつきの厄介者だ。當もねえのに、毎日研物の荷を擔いで、廓内をぶらついて、歸りにやあ箕輪の淨閑寺へ廻つて、以前御贔屓になりましたと、遊女の無縁の塔婆に挨拶をして來やあがる。そんな奴も差配内になくツちやあお祭の時幅が利かねえ。悴は稼いでるし、稲荷町の差配は店賃の取り立てにやあ歩行かねえツての、むゝ。」と大得意。此時五助はお若の剃刀をぴつたりと砥にあてたが、哄然として、

「氣に入つた〳〵、其も贔屓の仁左衛門だい。」

作平物語

九

「處で聞かつしやい、差配さまの謂ふのには、作平、一番念入に遣つてくれ、其代り儲かるぜ、十二分のお手當だと、膨らんだ懷中から、朱總つき、錦の袋入と云ふのを一面の。

何でも差配さんがお出入の、麹町邊の御大家の鏡ぢやさうな。

さあ此處ぢやよ。十九日に因縁づきは。憚つてお名前は出さぬが、と差配さんが謂はつしやる。其の御大家は今寡婦樣ぢや、まづ御後室といふのかい。處で其の旦那樣と謂ふのは然るべきお侍、最う其の頃は金モオルの軍人といふのぢや。

鹿兒島戰爭の時に大したお手柄があつて、馬車に乘らつしやるほどな御身分になんなされたとの。其方が少い時よ。

誰も此の迷ばかりは免れぬわ。矢張それ此方人等がお花主の方に深いのが一人出來て、雨の夜、雪の夜もぢや。とゞの詰りがの、床の山で行倒れ、其のまんまずッと引取られたいより他に、何の望もなくなつたといふものかい。居續けの朝のことだとの。

遊女は自分が薄着なことも、髪のこはれたのも氣がつかずに、しみ〴〵と情人の顏ぢや。窶れりや窶れるほど、嬉しいやうな男振ぢやが、大層髭が伸びて居た。

鏡臺の前に坐らせて、嗽茶碗で濡した手を、男の顏へ恁う懸けながら、背後へ廻つた、とまあ思はつせえ。

遊女は、胸にものがあつて爲たことか。故と八寸の延鏡が鏡立に据ゑてあつたが、男は映る顏に目も放さず。

うしろから肩越に氣高い顏を一所にうつして、遊女が死なうといふ氣ぢや。

あなた、私の心が見えませう、と覗込んだ時に、あゝ、堪忍しておくんなさい、と其の鏡を取つて俯向けにして、男がぴつたりと自分の胸へ押着けたと。

何を他人がましい、あなた、と肩につかまつた女の手を、背後ざまに彈ねたので、うんにや、愚痴なやうだがお前には怨がある。母様によく肖た顏を、こゝで見るのは申譯がないといつて、がつくり俯向いて男泣。

遊女は之を聞くと、何と思つたか、それだけのものさへ持てようかといふ痩せた指で、剃刀を握つたまゝ、顏の色をかへて、ぶる〳〵と震へたさうぢやが、突然逆手に持直して、何と、背後からものもいはずに、男の咽喉へ突込んだ。」

五助は剃刀の平を指で壓へたまゝ、ひよいと手を留めた。

「おゝ、危え。」

「其にの、刃物を刺すといや、針さしへ針をさすことより心得て居らぬやうな婦人ぢやあ無かつた。俺あ遊女の名と坂の名はつひぞ覺えたことは無えツて、差配さんは忘れたと謂はッしたつけ。

其の遊女は本名お縫さんと謂つての、御大身ぢやあなかつたさうぢやが、歴とした旗本のお孃さんで、お邸は番町邊。

何でも徳川様瓦解の時分に、父様の方は上野へ入んなすつて、お前、お孃さんが可哀さうにお邸の前へ莫蓙を敷いて、蒔繪の重箱だの、お雛様だの、錦繪だのを賣つてござつた、其處へ通りかゝつて兩方で見初めたといふ惡緣ぢや。男の方は長州藩の若侍。

其が物變り星移りの、講釋のいひぐさぢやあ無いが、有爲轉變、芳原でめぐり合、といふ深い交情であつたげな。

牛込見附で、仲間の亂暴者を一人、内職を屆けた歸りがけに、もんどりを打たせたといふ手利なお孃さんぢや、廓でも一時四邊を拂つたといふのが、思ひ込んで剃刀で突いた奴。」

「ほい。」

十

「男はまるで油斷なり、萬に一つも助かる生命ぢやあ無かつたらうに、御運かの。遊女は氣がせいたか、少し狙がはづれた處へ、其の胸に伏せて、うつむいて居なすつた、鏡で、かちりと其の、剃刀の刃が留まつたとの。

私は何方が何とも謂はぬ。遊女の最屓をするのぢやあないけれど、思詰めたほどの事なら、遂げさして遣りたかつたわ、其だけ心得のある婦人が、仕損じは、まあ、何うぢや。」

「然れば、」

「其の代り返す手で、我が咽喉を刎ね切つた遊女の姿の見事さ！

口惜しい、口惜しい、可愛い此の人の顏を餘所の婦人に見せるのは口惜しい！との、唇を嚙んだまゝ、それなりけり。

全く鏡を見なすつた時に、はッと我に返つて、最う惡所には來まいといふ、屹とした心になつたのぢやげな。

容子で悟つた遊女も目が高かつた。男は煩惱の雲晴れて、はじめて拜む眞如の月かい。生命の親なり智識なり、と其まゝ頂かしつた、鏡がそれぢや。はて總つき錦の袋入は其筈ぢやて、お家に取つては、寶ぢやものを。

念を入れて仕上げてくれ、近々に其の後室樣が、實の兒よりも可愛がつておいでなさる、甥御が一方。惡い茶も飲まずに、然る立派な學校を卒業なされた。其のお祝に、御教訓をかねてお遣物になさるつもり、先づまあ早くいつて見りや、油斷が起つて女狂、つまり惡所入などをしなさらぬやうにといふのぢや。

作平賴む、と差配さんが置いて行かれた。畏り奉るで、昨日それが出來て、差配さんまで差出すと、直に麴町のお邸とやらへ行かしつた。

點火頃に歸つて來て、作、喜べ、と大枚三兩。これは〳〵と心から辭退をしたけれども、いや先方樣でも大喜び、實は鏡について其の話のあつたのは、御維新になつて八年、霜月の十九日ぢや。月こそ違ふが、日は同一、丁ど昨日の話で今日、更めて其の甥御樣に送る間にあつた、といふことで、研賃には多からうが、一杯飲んでくれと、恁ういふのぢや。

頂きます〳〵、飲代になら百兩でも御辭退仕りまする儀ではござりませぬと、さあ飲んだ、飲んだ、昨夜一晩。

ウイか何かで喃五助さん、考へて見ると成程な、其の大家の旦那がすつかり改心をなされた、こりや至極ぢやて。

お連合の今の後室が、忘れずに、大事にかけてござらつしやる、お心懸も天晴なり、來歷づきでお寶物にされた鏡は又錦の袋入。此奴も可いわい。其の研手に私をつかまへた差配さんも氣に入つたり、研いだ作平も先づ可いわ。立派な身分になんなすつた甥御も可し。戒のためと謂うて、遣物にさつしやる趣向も受けた。手間ぢやない飲料にせいといふ文句も可しか、酒も可いが、五助さん。

其の發端になつた、旗本のお孃さん、剃刀で死んだ遊女の身になつて御覽じろ、又この位よくない話はあるまい。

迷ぢや、迷は迷ぢやが、自分の可愛い男の顏を、他の婦人に見せるのが厭さに、迚もとあきらめた處で、殺して死なうとまで思ひ詰めた、心は何うぢやい。

其を考へれば酒も咽喉へは通らぬのを、いや然うでない。魂魄此土に留まつて、淨閑寺にお參詣をする私への禮心、無緣の信女達の總代に麴町の寶物を稻荷町までお遣はしで、私に一杯振舞うてくれる氣、と、早や、手前勝手。飲みたいばかりの理窟をつけて、さて、煽るほどに、けるほどに、五助さん、何うだ。

私の顏色の惡いのは、お憚りだけれど今日ばかりは貧乏の所爲でない。三年目に一度といふ二日醉の上機嫌ぢや、はゝは。」と然も快げに見えた。

夕空

十一

時に五助は反故紙を扱いて研ぎ澄した剃刀に拭をかけたが、持直して掌へ。

折から夕暮の天暗く、筑波から出た雲が、早や屋根の上から大鷲の嘴の如く田町の空を差覗いて、一時烈しくなつた往來の人の姿は、唯黑い影が行違ひ、入亂るゝばかりになつた。

此際一際色の濃く、鮮かに見えたのは、屋根越に遠く見ゆる紅梅の花で、二上屋の寮の西向の硝子窓へ、たら〳〵と流るゝ如く、橫雲の切目から唯ばかりの間、夕陽が映じたのである。

剃刀の刃は手許の暗い中に、靑光三寸、颯々と音をなして、骨をも切るやう皮を辷つた。

「これだからな、自慢ぢやあねえが惡くすると人ごろしの得物にならあ。ふむ、其が十九日か。」

といつて少し鬱ぐ。

「其處で久しぶりぢや、私も些と冷える氣味で此方へ無沙汰をしたで、又心ゆかしに廓を一廻、それから例の箕の輪へ行つて、何うせ苔の下ぢやあらうけれど、ぶツつかり放題、其のお孃さんの墓と思つて挨拶をして來ようと、ぶら〳〵內を出て來たが。

お極りでお前ン許へお邪魔をすると、不思議な話ぢや。あと前は能く分らいでも、十九日とばかりで聞く耳が立つたての。

何ぢや知らぬが、日が違はぬから、こりやものぢや。

五助さん、お前の許にも然いふかゝり合があるのなら、惡いことは謂はぬ、お題目を唱へて進ぜなせえ。

つい話で遲くなつた。やつとこさと、今日は最う箕の輪へだけ廻るとしよう。」と謂ふだけのことを謂つて、作平は早や腰を延さうとする。

トタンにがら〳〵と腕車が一臺、目の前へ顯れて、人通の中を曳いて通る時、地響がして土間ぐるみ五助の體はぶる〳〵と胴震。

「ほう、」といつて、俯向いて居た茫乎の顏を上げると、目金をはづして、

「作平さん、お前は怨だぜ、然うでなくッてさへ、今日はお極りのお客樣が無けりや可いが、と朝から父親の精進日位な氣がして居るから、有體の處腹の中ぢやお題目だ。

唱へて進ぜなせえは聞えたけれど、お前、言種に事を缺いて、私が許をかゝり合は、大に打てらあ。いや、最う的切疑ひなし、毛頭違ひなし、お旗本のお孃さん、何うして堪るものか。話のやうぢやあ念が殘らねえでよ、七代までは祟ります、むゝ祟るとも。

串戲ぢやあねえ、何の道何か怨のある遊女の幽靈とは思つたけれど、何樓の何だか捕へどこのねえ內はまだしも氣休め。然う日が合つて剃刀があつて、當りがついちやあ叶はねえ。

而してお前、咽喉を突いたんだつていつただぢやあねえか。」

「これから、此へ、」と作平は垢じみた細い皺だらけの咽喉佛を露出して、握拳で仕方を見せる。

五助も我知らず、ばくりと口を開いて、

「あゝ、あゝ、嘸、血が出たらうな、血が、」

「そりや出たらうとも、たら〳〵〳〵、」と胸へ眞直に棒を引く。

「うゝ、而して眞赤か。」

「黑味勝ぢや、鮪の腸のやうなのが、たら〳〵〳〵。」

「止しねえ、何だなお前、それから口惜いッて齒を嚙んで、」

「怨死ぢやの。恁う髮を啣へての、凄いやうな美しい遊女ぢやとの、恐いほど品の好いのが、それが、お前恁う。」と口を歪める。

「おゝ、おゝ、苦しいから白魚のやうな手を掴み、足をぶる〳〵。」と五助は自分で身悶して、

「而してお前、死骸を見たのか。」

「何を謂はつしやる、私は話を聞いただけぢや。遊女の名も知りはせぬが。」

五助は目を睜つてホッと呼吸、

「何の事だ、まあ、おどかしなさんない。」

作平も苦笑ひ、

十二

「だつてお前が、をかしくもない、血が赤いかの、指をぶる〳〵だの、と謂ふからぢや。」
「目に見えるやうだ。」
「私も矢張。」
「見えるか、えゝ？」
「先づの。」
「何も然う幽靈に親類があるやうに落着いて居てくれるこたあねえ、これが同一でも、をばさんに雪責にされて死んだとでも謂ふ脆弱い遊女のなら、五助も男だ。恁うまでは驚かねえが、旗本のお嬢さんで、手が利いて、中間を一人もんどり打たせたと聞いちやあ身動きがならねえ。
作平さん、恁うなりやお前が對手だ、放しッこはねえぜ。
一升買ふから、後生だからお前今夜は泊り込で、炬燵で附合つてくんねえ。一體ならお勝さんが休まうといふ日なんだけれど、限つて出て了つたのも容易でねえ。
然うかと謂つて、宿場で厄介にならうといふ年紀ぢやあなし、無茶に廓へ入るかい、却つて敵に生捉られるも同然だ。夜が更けて見な、油に燈心だから堪るめえぢやねえか、恐しい。名代部屋の天井から忽然として剃刀が天降ります、生命にかゝはるからの。よ、隣のは筋が可いぜ、はんぺんの煮込を御厄介になつて、別に厚切な鮪を取つて置かあ、船頭、馬士だ、お前と又昔話

でもはじめるから、」と目金に恥ぢず悄げたりけり。
作平が悦喜斜ならず、嬉涙より眞先に水鼻を啜つて、
「話せるな、酒と聞いては足腰が立たぬけれども、此まゝお輿を据ゑては例のお花主に相濟まぬて。」
「其を言ふなといふに。無縁塚をお花主だなぞと、兎角魔の物を知己にするから悪いや、で、何うする。」
「最う遲いから廓廻は見合せて直ぐに箕の輪へ行つて來ます。」
「むゝ、其も然うさの、私も信心をするが、お前もよく拜んで御免蒙つて來ねえ。廓處か、淨閑寺の方も一走が可いぜ。迚も獨ぢや遣切れねえ、荷物は確に預つたい。」
「何か私も旨え乾物など見付けて提げて來よう、待つて居さつせえ。」と作平はてく〳〵出かけて、
「こんなに人通があるぢやないかい。」
「うんや、此處等を歩行くのに怨靈を得脫させさうな賴母しい道德は一人も居ねえ。それに一しきり一しきりひッそりすらあ、又其の時の寂しさといふものは、まるで時雨が留むやうだ。」
作平は空を仰いで、
「すつかり曇つて暗くなつたが、此の陽氣はづれの寒さでは、」

五助慌しく、
「白いものか、禁物々々。」

點灯頃

十三

「はい、はい、はい、誰方だい。」
作平のよぼけた後姿を見失つた五助は、目の行くさきも薄暗いが、さて見廻すと居廻は猶のことで、最う點灯頃。
物の色は分るが、思ひなしか陰氣でならず、何時より疾く洋燈をと思ふ處へ、大音寺前の方から盛に曳込んで來る乘込客、今度は五六臺、引續いて三臺、四臺、少時は引きも切らず、がッがッ、轟々といふ音に、地鳴を交へて、慣れたことながら腹にこたへ、大儀さうに、唯眺めて居たが、やがて途絶えると裏口に氣勢があつた。
五助は故と大聲で、
「お勝さんかね、……何だ、隣か、」と投げるやうに呟いたが、

「あれ、お上んなせえ、構はずずいと入るべし、誰方だね。」
耳を澄して、
「畜生、此間も彼の術で驚かしやあがつた、尨犬め、然も眞夜中だらうぢやあねえか、トントントンさ、誰方だと聞きやあ默然で、蒲團を引被るとトントンだ、誰方だね、默りか、又トンか、びッくりか、トンと來るか。とう〳〵戸外から廻つてお隣で御迷惑。何の位か臆病づらを下げて、極の悪い思をしたか知れやしねえ、畜生め、己が臆病だと思ひやあがつて、」と中ッ腹ですいと立つと、不意に膝かけの口が足へからんだので、龜の子這。
ぢたゞらを踏むばかりに蹴はづして、一段膝をついて躍り上ると、件の障子を密と開けたが、早や次の間は眞暗がり。足をずらしてつか〳〵と出ても、馴れて疊の破にも突かゝらず、臺所は横づけで、長火鉢の前から手を伸すと其まゝ取れる柄杓だから、並々と一杯、突然天窓から打かぶせる氣、お勝がそんな家業でも、さすがに婦人、びつたりしめて行つた水口の戸を、がらりと開けて、
「畜生！」といつたが拍子抜け、犬も何にも居ないのであつた。
首を出して眴はすと、がさともせぬ裏の塵塚、其處へ潛つて遁げたのでもない。彼方は黑塀が犇々と、遙に一並、一ッ折れて又一並、三階の部屋々々、棟の數は多いけれど、未だ何處にも灯

が入らず、森として三味線の音もしない。但遙に空を衝いて、雲の其の夜は眞黑な中に、暗緑色の燈の陰慘たる光を放つて、大屋根に一眼一角の鬼の突立つたやうなのは、二上屋の常燈である。

五助は半身水口から突出して立つて居たが、頻に後見らるゝやうな氣がして堪らず、柄杓をぴつしやり。

「ちよッ、」と舌打、振返つて、暗がりを透すと、明けたまゝの障子の中から仕切つたやうに戸外の人どほり。

やがて舊の仕事場の座に返つて、フト心着いてはッと思つた。

「おや、變だぜ。」

五助は片膝立て、中腰になり、四ッに這ひなどして搔探り、膝かけをふるつて見て、きよときよとしながら、

「はてな、先刻あゝだに因つてと、手に持つたまゝ、待てよ、作平は行つたと、はてな。」

正に今日の日を以て、先刻研上げた、紅梅屋敷、卽ち寮の女お若の剃刀を、何處へか置忘れて了つたのであつた。

「懷中へは入れず、」といひながら、慌てて懷中へ入れた手を、其なり胸に置いて、顏の色を變へたのである。

しばらくして、

「まさか棚へ、」と思はず聲を放つて、フト顏を上げると、一枚あけた障子の際なる敷居の處を裾にして、扱帶の上あたりで褄を取つて、鼠地に雪ぢらしの模樣のある部屋着姿、眉の鮮かな鼻筋の通つた、眞白な頰に鬢の毛の亂れたのまで、判然と見えて、脊がすらりとして、結上げた髪が鴨居にも支へさうなのが、じつと此方を見詰めて居たので、五助は小さくなつて氷りついた。

「五助さん、」と得も言はれぬやゝ太い聲して、左の手で襟をあけると、褄を持つて居た手を、ふらふらとある袖口に入れた時、裾がはらりと落ちて、脊が二三寸伸びたと思ふと、肉つき豐かなぬくもりも未だありさうな、乳房も見える懷から、まともに五助に向けた蒼ざめた掌に、毒蛇の鱗の輝くやうな一挺の剃刀を挾んで居て、

「これでせう、

五助はぐわッと耳が鳴た、頭に響く聲も幽に、山あり川あり野の末に、絲より細く聞ゆる如く、

「不淨除けの別火だとさ、ほゝゝほゝ、」

纔に解いた唇に、艶々と鐵漿を含んで居る、幻は却つて目前。

「わッ」といふと眞俯向、五助は人心地あることか。

「横町に一ッづゝある芝の海さ、見や、長屋の中を突通しに廓が見えるぜ。」

と此際戸外を暢氣なもの。

「や！雪だ、雪だ。」と呼はつたが、どや〳〵として、學生あり、大へゞれけ、雪の進軍氷を踏んで、と哄とばかりになだれて通る。

雪の門

十四

宵に一旦ちら〳〵と降つたのは、垣の結目、板戸の端、廂、往來の人の頰、鬢の毛、帽子の鍔などに、さら〳〵と音づれたが、やがて聲はせず、然るものの降るとも見えないで、木の梢も、屋の棟も、敷石も、溝板も、何よりはじまるともなしに白くなつて、煙草屋の店の灯、おでんの行燈、車夫の提灯、苟もあかりのあるものに、一しきり一しきり、綿のちぎれが群つて、眞白な灯取蟲がばた〳〵羽をあてる風情であつた。

やがて、初夜すぐるまでは、縱横に亂れ合つた足駄駒下駄の痕も、次第に二ツとなり、三ツとなり、僅に凹を殘すのみ、車の轍も遙々と長き一條の名殘となつた。

おう〳〵と遠近に呼交す人聲も早や聞えず、辻に彳んで半身に雪を被りながら、搖り落す毎に

上衣のひだの黑く顯れた巡査の姿、研屋の店から八九間さきなる軒下に引込んで、三島神社の邊から大音寺前の通、田町にかけて唯一白。

折から颯と渡つた風は、はじめ最も低く地上をすつて、雪の上面を撫でて恰も飾をかけたやう、一樣に平にならして、人の歩行いた路ともなく、夜の色さへ埋み消したが、見る〳〵垣を亙り、軒を吹き、廂を掠め、梢を鳴らし、一陣忽ち虛蒼に擴がつて、ざつといふ音烈しく、丸雪は小雪を誘つて、八方十面降け亂れて、靜々と落ちて來た。

紅梅の咲く頃なれば、恁くまでの雪の狀も、旭とともに霜より果敢なく消えるのであらうけれど、丑滿頃ほひは都の然も如月の末にあるべき現象とも覺えぬまで也。何物かこれ、此の大都會を襲つて、紛々皚々の陣を敷くとあやまたるゝ。

さればこそ、高く龍燈の露れたやう二上屋の棟に蒼き光の流るゝあたり、よし原の電燈の幽に映ずる空を籠めて、きれ〴〵に冴ゆる三絃の絲につれて、高笑をする女の聲の、倒に田町へ崩るるのも、恰も此の土の色の變つた機に乘じて、空を行く外道變化の囁かと物凄い。

十二時疾くに過ぎて、一時前後、雪も風も最も烈しい頃であつた。

吹雪の下に沈める聲して、お若が寮なる紅梅の門を靜に音信れた者がある。

丁、丁、丁、丁。

「唯、今開けます、唯今、々々、」と内では、うつら〳〵とでもして居たらしい、眠け交りの稍周章てた聲して、上框から手を伸した様子で、掛金をがッちり。

爾時戸外に立つたのが、

「お待ちなさい、貴方はお宅の方なんですか。」と、ものありげに言つたのであるが、何の氣もつかない風で、

「唯々、あの、杉でございます。」と、恰も其の眠つて居たのを、詫びるが如き口吻である。

其の間になほ聲をかけて、

「宜いんですか、開けても、夜がふけて居ります。」

「へい、……、」些と變つた言ぐさを此時はじめて氣にしたらしく、杉といふのは、其まゝじつとして手を控へた。

小留のない雪は、軒の下ともいはず浴びせかけて降しきれば、男の姿はありとも見えずに、風は益々吹きすさぶ。

十五

「杉、爺やかい。」と此の時に奥の方から、風こそ荒べ、雪の夜は天地を沈めて靜に更け行く、疊

にはら〳〵と媚めく跫音。

端近になつたが最少く清しき聲で、

「辻が歸つておいでかい。」

「あれ、」と低聲に年增が制して、門なる方を憚る氣勢。

「可かつたら開けて下さい、此方にお知己の者ぢやあ無いんです、」

「……」

「此の突當の家で聞いて來たんですが、紅梅屋敷とかいふのでせう。」

「唯、あの誰方様で、」

「否、御存じの者ぢやアありませんが、些し頼まれて來たんです、構ひません、此處で言ひますから、あのね。」

「お開けよ。」

「……」

「此方へさあ。可いわ、」

こゝに於て、

「まあ、お入りなさいまし。」と半ば壓へて居た格子戸をがらりと開けた。框にさし置いた洋燈の

光は、ほの〳〵と一筋、戸口から雪の中。

同時に身を開いて一足あとへ、體を斜めにする外套を被た人の姿を映して、餘の明は、左手なる前庭を仕切つた袖垣を白く描き、枝を交へた紅梅にうつッて、間近なるは其の紅の莟を照した。

けれども、其最もよく明かに且つ美しく照したのは、雪の風情でなく、花の色でなく、お杉がさした本斑布の櫛でもない。濃いお納戸地に柳立枠の、小紋縮緬の羽織を着て、下着は知らず、黒繻子の襟をかけた縞縮緬の着物といふ、寮のお若が派手姿と、障子に片手をかけながら、身をそむけて立つた脇あけをこぼるゝ襦袢と、指に輝く指環とであつた。

部屋働のお杉は圓髷の頭を下げ、

「何うぞ、貴下、」

「それでは、」と身を進めて、さすがに堪へ難うしてか、飛込む勢。中折の帽子を目深に、洋服の上へ着込んだ外套の色の、黒いがちら〳〵とするばかり、しッくひ叩きの土間も、研出したやうな沓脱石も、一面に雪紛々。

「大變でございますこと、」とお杉が思はず、然もいたはるやうに言つたのを聞くと、吻とする呼吸をついて、

「あゝ、亂暴だ。失禮。」と身震して、丁々と輕く靴を踏み、中折を取ると柔かに亂れかゝる額髪

を拂つて、色の白い耳のあたりを拭つたが、年紀のころ二十三四、眉の鮮かな目附に品のある美少年。殊にものいひの判然として訛のないのは明に其の品性を語り得た。お杉は一目見ると、直ちに豫て信心の成田様の御左、矜羯羅童子を夢枕に見るやうな心になり、

「嘸まあ、ねえ、何うもまあ、」とばかり見惚れて居たのが、慌しく心付いて、庭下駄を引かけると客の背後へ入交つて、吹雪込む門の戸を二重ながら手早くさした。

「直ぐにお暇を。」

「それでも吹込みまして大變でございますもの。」

唯見るとお若が、手を障子にかけて先刻から立つたまゝ茫乎身動もしないで居る。

「お若さん、御挨拶をなさいましなね、」

お若は莞爾して何にも言はず、突然手を支へて、ばッたり悄れ伏すが如く坐つたが、透通るやうな耳許に颯と紅。

髷の根がゆら〳〵と、身を揉むばかり然も他愛なささうに笑つたと思ふと、フイと立つてばたばたと見えなくなつた。

客は手持無沙汰、お杉も爲ん術を心得ず。唯ばかりありて、次の室の襖越に、勿體らしい澄したものいひ。

「杉や、長火鉢の處ぢやあ失禮かい。」

十六

「否、貴下失禮でございますが、別にお座敷へ何いたしますと、寒うございますから。而してこれをお羽織んなさいまし、氣味が惡いことはございません、仕立ましたばかりでございます。」と裏返しか、新調か、知らず筋絲のついたまゝなる、結城の棒縞の寢ね子半纏。被せられるのを、

「何、そんな、」と却て剪賊に出逢つたやうに、肩を捻るほどなほすべりの可い花色裏。雪まぶれの外套を脱いだ寒さうで傷々しい、背から苦もなくすらりと被せたので、洋服の上に此の廣袖で、長火鉢の前に胡坐したが、大黑屋惣六に肖て否なるもの、S.DAIKOKUYAといふ風情である。

「何うしてこんな晩に、遊女がお歸しなすつたんですねえ、酷いッたらないぢやアありませんか、ねえお若さん。あら、何うも飛でもない、火をお吹きなすつちやあ不可ません、飛でもない。」

と什麼恁うすりや何とまあ？花の唇が忽ち變じて、烏の嘴にでも化けるやうな、部屋働の驚き方。お若は美しい眉を顰めて、澄して、雪のやうな頰を火鉢のふちに押つけながら、

「消炭を取つておいで、」

「唯今何します、何うも、貴下御免なさいましよ。主人が留守だもんですから、少姐さんのお部

屋でついお心易立にお炬燵を拜借して、續物を讀んで頂いて居りました處が、」

「つい眠くなつたぢやあないか、」とお若は莞爾する。

「それでも今夜のやうに、ふら〳〵睡氣のさすつたらないのでございますもの。」

「お極だわ。」

「可哀相に、否、それでも、全く、貴下が戸をお叩き遊ばしたのは、現でございましたの。」

「私もうと〳〵して居たから、何んなにお待ちなすつたか知れないねえ。眞個に貴下、こんな晩に歸しますやうな處へは、最う行らつしやらない方が可うございますわ。構やしません、そんな遊女は一晩の内に凍砂糖になつて了ひます。」と眞顏で然も思ひ入つたやうに言つた。お若は此の人を廓なる母屋の客と思込んだものであらう。

「私は、そんな處へ行つたんぢやあ無いんです。」

「お隱し遊ばすだけ罪が深うございますわ、」

「別に隱しなんぞするものか。

然し飛んだ御厄介になりました、見ず知らずの者が夜中に起して、何だか氣が咎めたから入り惡くッて居たんだけれど、深切にいつておくんなさるから、白狀すりや渡に舟なんで、何うも凍えさうで堪らなかつた。」

と語るに、ものもいひ悪さうな初心な風采、お杉は然らぬだに信心な處、しみ〴〵と本尊の顔を瞻りながら、

「然う言へばお顔の色も悪いやうでございます、あの丁ど取つたのがございますから、熱くお燗をつけませうか。」

「召あがるか知ら、」とお若は部屋ばたらきを顧みて、これは却つて其の下戸であることを知り得たるが如き口ぶりである。

「何うして、酒と聞くと身震がするんだ、何うも、」

と言ひながら顔を上げて、座右のお杉と、彼方に目の覺めるやうなお若の姿とを屹と見ながら、明い洋燈と、今青い炎を上げた炭とを、嬉しさうに打眺めて、又ほッといきをついて、

「私を變だと思ふでせう。」

十七

「自分でも何だか夢を見てるやうだ。否藥にも及ばない、最う可いんです。何だね、此處は二上屋といふ吉原の寮で、お前さんは、女中、あゝ、然して姉さんはお若さん？」

「はい、然やうでございます。」とお若はあでやかに打微笑む。

「えゝと、此處を出て突當りに家がありますね、其處を通つて左へ行くと、恁う坂になつて居ませうか、然う、其處から直に大門ですか、然う、ぢやあ分つた、姉さん、」とお若の方に向直つた。

「姉さんに屆けるものがあるんです、」といひながらお杉に向ひ、

「確か廓へ入らうといふ土手の手前に、此方から行くと坂が一ッ。」

打頷けば頷いて、

「最う分つた、其處です、其の坂を上らうとして、雪にがつくり、腕車が支へたので漸と目が覺めたんだ。」

此の日脇屋欽之助が獨逸行を送る宴會があつた。

「實は今日友達と大勢で伊豫紋に會があつたんです、私が些と遠方へ出懸ける爲に出來た會だつたもんだから、方々の杯の目的にされたんで、大變に醉つちまつてね。横になつて寢てでも居たらうか、歸りがけに何處で腕車に乘つたんだか、まるで夢中。

尤も待たして置く筈の腕車はあつたんだけれども、一體内は四ッ谷の方、あれから下谷へ驅けて來た途中、お茶の水から外神田へ曲らうといふ、角の時計臺の見える處で、鐵道馬車の線路を横に切れようとする發奮に、荷車へ突當つて、片一方の輪をこはして了つて、投出されさ。」

「まあ、お危うございます、」

「些と擦剝いた位、怪我も何もしないけれども。

それだもんだから、辻車に飛乘をして、ふら〳〵眠りながら來たものと見えます。

お話の其の土手へ上らうといふ坂だ。しつくり支へたから、はじめて氣がついてね、見ると驚いたらうぢやあないか。いつの間にか四邊は眞白だし、宛然野原。右手の方の空にやあ半月のやうに雪空を劃つて電燈が映つてるし、今度行かうといふ、其の遠方の都の冬の處を、夢にでも見て居るのぢやあるまいかと思つた。

其で、御本人は正しく日本の腕車に乘つてさ、笑つちやあ不可い車夫が日本人だらうぢやあないか。雪の積つた泥除をおさへて、何處だ、若い衆、何處だ、此處はッて、聞くと、御串戲もんだ、と言ふんです。

四ッ谷へ歸るんだッてね、少し焦れ込むと、まあ宜うがすッさ、お聞きよ。

馬鹿にしちや可かん、と言つて、間違の原因を尋ねたら、何も朋友が引張つて來たといふ譯ぢやあなかつた。腕車に乘つた時は私一人雪の降る中をよろけて來たから、丁ど伊藤松坂屋の前の處で、旦那召しまし、と言つたら、あゝ遣つてくれ、といつて乘つたさうだ。

遣つてくれと言ふから、廓へ曳いて來たのに不思議はありますまいと澄したもんです。議論をしたつておッつかない。吹雪ぢやアあるし、何でも可いから宅まで曳いてッておくれ、お禮はす

るからと、私も困つてね。

賴むやうにしたけれど、此處まで參つたのさへ大汗なんで、迚も坂を上つて四ッ谷くんだりまで此の雪に行かれるもんぢやあない。

箱根八里は馬でも越すがと、茶にして居やがる。其に今夜些と河岸の方とかで泊り込といふ寸法があります、何ならおつき合なさいましと、傍若無人、じれッたくなつたから、突然靴だから飛び下りたさ。」

二人使者

十八

欽之助は茶一碗、靈水の如くぐつと干して、

「お恥かしいわけだけれど、實は上野の方へ出る方角さへ分らない。芳原は其處に見えるといふのに、車一臺なし、人ッ子も通らない。聞くものはなし、一體何時頃か知らんと、時計を出さうとすると、をかしい、掏られたのか、落したのか、鎖ぐるみなくなつて居る。時間さへ分らなくなつて、しばらく彼の坂の下り口に茫乎して立つて居た。

心細いッたらないのだもの、おまけに目もあてられない吹雪と來て、醉覺ぢやあり、寒さは寒し、四ッ谷までは百里ばかりもあるやうに思つたねえ。然うすると何だか又夢のやうな心持になつてさ。生れてはじめて迷兒になつたんだから、こりや自分の身體は何うかいふわけで、こんなことになつたのぢやあ無からうかと、馬鹿々々しいけれども、恐くなつたんです。

唯車夫に間違へられたばかりなら、雪だつても今帷子を着る時分ぢやあなし、些とも不思議なことは無いんだけれども。

氣になるのは、晝間腕車が壞れて居ませう、其上、伊豫紋で座が定つて、杯の遣取が二ッ三ッ、私は五酌上戸だから最うふらついて來た時分、女中が耳打をして、玄關まで一寸お顏を、是非お目にかゝりたい、といふ方があるッてね。詰り呼出したものがあるんだ。

灯がついた時分、玄關は未だ暗かつた、宅で用でも出來たのかと、何心なく女中について、中庭の歩を越して玄關へ出て見ると、叔母の宅に世話になつて、從妹の書物なんか教へて居る婦人が來て立つて居ました。

先刻奥さんが、といふ、叔母のことです。四ッ谷のお宅へ行らつしやると、最うお出かけになりましたあとださうです。お約束のものが昨日出來上つて參りましたものですから、其を貴下にお贈り申したいとおつしやつて、お持ちなすつたのでございますが、お留守だといふので其まゝ

持つてお歸りなすつて、彼の兒のことだから、大丈夫だらうとは思ふけれど、然うでもない、お朋達におゝき合で、他ならば可いが、芳原へでも行くと危い。お出かけさきへ行つてお渡し申せ、と之を私にお預けなさいましたから、腕車で大急ぎで參りました。

何でも廣德寺前邊に居る、名人の研屋が研ぎましたさうでございますからッてね、紫の袱紗包から、錦の袋に入つた、八寸の鏡を出して、何と料理屋の玄關で渡すだらうぢやありませんか。」と少年は一呼吸ついた。お若と女中は、耳も放さず目も放さず。

「鏡の來歴は叔母が口癖のやうに話すから知つて居ます。何でも叔父が此廓で遊樂をして、命にも障る處を、其のお庇で人らしくなつたッてね。

私も決して良い處とは思はないけれども、大抵樣子は分つてるが、叔母さんと來た日にやあ、若い者が芳原へ入れば、其處で生命がなくなるとばかり信じてるんだ。

其の人に甘やかされて、子のやうにして可愛がられて育つた私だから、失禮だが、樣子は知つて居ても廓は恐しい處とばかり思つてるし、叔母の氣象も知つてるんだけれども、何うです、苟くも飲まうといつて、少い豪傑が手放で揃つてる、然も艶なのが、まはりをちら〳〵する處で、御意見の鏡とは何事だ。

而して懷へ入れて持つて歸れと來た日にやあ、私は人魂を押つけられたやうに氣が滅入つた。

然もお使番が女教師の、おまけに大の基督教信者と來ては助からんねえ。」
打微笑み、
「相濟まんが何うぞ宅の方へお屆けを、といつて平にあやまると、使の婦人が、私も主義は違つて居ります。恁やうなものは信じませんが、貴君を心から思召して在らつしやる方の志は通すもんです。私も其の御深切を感じて、喜んで參りました位です、かういふお使は生れてからはじめてです、と謂つた。こりや誰だつて、全く然う。」

十九

「しかし土手下で雪に道を遮られて歸る途さへ分らなくなつた時思出して、あゝ、彼を頂いて持つて居たら、こんな出來事が無かつたのかも知れない。考へて見ればいくら叔母だつて、故々伊豫紋まで鏡を持して寄越すつてことは容易でない。其を持して寄越したのも何かの前兆、私が受取らないで女の先生を歸したのも、腕車の破れたのも、車夫に間違へられたのも、來よう筈のない、芳原近くへ來る約束になつて居たのかも知れないと、くだらないことだが、悚としたんだね。尤も、爾時だつて、天窓からけなして受けなかつたのぢやあない、懷へでも入れば受取つたんだけれども、」

我が胸のあたりをさしのぞくが如くにして、
「こんな扮裝だから困つたらうぢやありませんか。叔母には受取つたといふことに繕つて、密と貴女から四ツ谷の方へ屆けて置いて下さいッて、頼んだもんだから、少い夜會結の其の先生は、不心服なやうだッけ、其では、腕車で直ぐ、お宅の方へ、と謂つて歸つちまつたんですよ。
あとは大飲。
何しろ土手下で目が覺めたといふ始末なんですから。
それからね。
何でも來た方へさへ引返せば芳原へ入るだけの憂慮は無いと思つて、とぼ〳〵遣つて來ると向ひ風で。
右手に大溝があつて、雪を被いで小家が並んで、そして三階造の大建物の裏と見えて、ぼんやり明のついてるのが見えてね、刎橋が幾つも〳〵、宛然卯の花縅の鎧の袖を、恁う、」
借着の半纏の袂を引いて。
「裏返したやうに溝を前にして家の屋根より高く引上げてあつたんだ。」
其れも物珍しいから、むや〳〵の胸の中にも、傍見がてら、二ツ三ツ四ツ五足に一ツくらゐを

數へながら、靴も沈むばかり積つた路を、一足々々踏分けて、欽之助が田町の方へ向つて來ると、鐵漿溝が折曲つて、切れようといふ處に、一ツだけ、其の溝の色を白く裁切つて刎橋の架つたまのがあつた。

「其處の處に婦人が一人立つてました、や、路を聞かう、聲を懸けようと思ふ時、近づく人に白鷺の驚き立つやう。

前途へすた〳〵と歩行き出したので、何だか氣がさして此方でも立停ると、劇しく雪の降り來る中へ、其の姿が隱れたが、見ると刎橋の際へ引返して來て、又する〳〵と向うへ走る。

續いて歩行き出すと、向直つて此方へ歸つて來るから、私も又立停るといふ工合、其が三度目には擦違つて、婦人は刎橋の處で。

私は歩行き越して入違ひに、今度は振返つて見るやうになつたんだ。

然うすると其の婦人が恁う彳んだ切、うつむいて、然も思案に暮れたといふ風、悄乎として哀さつたらなかつたから。

私は二足ばかり引返した。

何か一人では仕兼ねるやうなことがあるのであらう、そんな時には差支へのない人に、力になつて欲しからう。自分を見て遁げないものなら、何んな祕密を持つて居ようと、聲をかけて、構

ふまいと思つてね。

實は何、此方だつて味方が欲い。又どんな都合で腕車の相談が出來ないものでも無いとも考へたから。

お前さん何うしたんですッて。」

「まあ、御深切に、」と、話に聞惚れたお若は、不意に口へ出した、心の聲。

「傍へ寄つて見ると、案の定、跣足で居る、實に亂次ない風で、長襦袢に扱帶をしめたッ切、鼠色の上着を合せて、兵庫といふ髪が判然見えた、それもばさ〳〵して今寢床から出たといふ姿だから、私は知らないけれども疑ふ處はない、勤人だ。

脊の高いね、恐しいほど品の好い遊女だつたッけ。」

二十

「其の婦人に賴まれたんです。姉さん、」と謂ひかけて、美しい顏をまともに屹と女に向けた。

お若は晴々しさうに、一寸背けて、大呼吸をつきながら、默つて聞いて居るお杉と目を合せたのである。

「誰？」

「へい。」と、たゞまじ〳〵する。

「姉さんに、其の遊女が今夜中にお屆け申す約束のものがあるが、寮に在らつしやるお若さん、同一御主人だけれども、旦那とかには謂はれぬこと、朋友にも知れてはならず、新造などにさとられては大變なので、晝から間を見て、と思つても、つい人目があつて出られなかつた。

丁ど今夜は、內證に大一座の客があつて、雪はふる、部屋々々でも寐込んだのを機にぬけて出て、此處までは來ましたが、土を踏むのにさへ遠退いた、足がすくんで震へる上に、今時恁ういふ處へ出られる身分の者ではないから、何樣目に逢はうも知れない。

寮はもう其處に見えます。一町とは間のない處、紅梅屋敷といへば直に知れますが、あれ、あんなに犬が吠えて、何うすることもならないから、生命を助けると思つて、之れを屆けて下さいッて、拜むやうにして言つたんだ。成程今考へると此處いらで大層犬が吠えたつけ。

何、賴まれる方では造作のないこと、本人に取つては何か知ら、樣子の分らぬ廓のこと、一大事でもあるやうだから、直にことづかつた品物があるんです。

唯渡せば可いか、といふとね、名も何にもおつしやらないでも、寮の姉さんはよく御存じ、と恁ういふから、承知した。

其の寮はッて聞くと、此處を一町ばかり、左の路地へ入つた處、丁度可い、歸路も其處だといふもの。其儘別れて遣つて來ると、先刻尋ねました、路地の突當りになる通の內に、一軒灯の見える長屋の前まで來て、振向いて見ると、其婦人がまだ立つて居て、此方へ指をしたやうに見えたけれども、朧氣でよくは分らないから、一番、其の灯を幸。

路地をお入んなさいッて、酒にでも醉つたらしい、爺の聲で敎へてくれた。

何、一々委しいことをお話しするにも當らなかつたんだけれど、此方へ入つて、はじめて、此の明い灯を見ると、何だか雪路のことが夢のやうに思はれたから、自分でも確乎氣を落着けるため、それから、筋道を謂はないでは、夜中に婦人ばかりの處へ、譬へ賴まれたッても變だから。

然ういふ譯です、兎も角も其の賴まれたものを上げませう、」といつて、無造作に肱を張つて、左の胸に高く取つた衣兜の中へ手を入れた。——

固くなつて聞いて居た、二人とも身動きして、お若は愛くるしい頰を支へて白い肱に襦袢の袖口を搦めながら、少し仰向いて、考へるらしく銀のやうな目を細め、

「何だらうねえ、杉や。」

「然やうでございます、」とばかり一大事の、生命がけの、約束の、助けるのと、些とも心あたりは無かつたが、敢て客の言を疑ふ色は無かつたのである。

「待つて下さい、」と此時、又右の方の衣兜を探つて、小首を傾け、

「はてな、ぢやあ外套の方だつた、」と片膝立てたので。
杉、
「私が。」
「確か左の衣兜へ、」
と差俯いた處へ、玄關から、此人のと思ふから、濡れたのを厭はず、大切に抱くやうにして持つて來た。
敷居の上へ斜に擴げて、又其の衣兜へ手を入れたが、冷たかつたか、慄としたやう。

二十一

「可うございますよ、お落しなさいましても、あなた些とも御心配なことはないの。」
探しあぐんで、外套を押遣つて、些と慌てたやうに廣袖を脱ぎながら、上衣の衣兜へ又手を入れて、顏色をかへて悄れてじつと考へた時、お若は鷹揚に些も意に介する處のないやうな、然も情の籠つた調子で、却つて慰めるやうに謂つた。
お杉は心も心ならず、憂慮しげに少年の狀を瞻りながら、さすがに此の際喙を容れかねて居たのであつた。

此方は益々當惑の色面に顯れ、
「可いぢやアありません、可かあない、可かあない、
と自ら我身を詈る如く、
「落すなんて、そんな間のあるわけはないんだからねえ、賴んだ人は生命にもかゝはる。」と、早口にいつて又四邊を眴した。
「一體どんなものでございます。」とお杉は少年に引添うて、渠を庇ふやうにして言ふ。
「私も更めちや見なかつた、否、實は見ようとも思はなかつたやうな次第なんです。何でも恁う紙につゝんだ、細長いもので、受取つた時少し重みがあつたんだがね。」
お若は一寸頷いて、
「杉、」
「えゝ、」
「瀨川さんの……ね、あれさ、」と呑込ませる。
「えゝ、成程、貴下、それぢやあ、何でございますよ、抱への瀨川さんといふ方にお貸しなすつたんですよ、あの、お賴まれなすつた遊女は、脊の高い、品の可い、而して淋しい顏色の、あゝ煩つて居るもんだから的切、然う！」

と勢よく其にした。

「今夜までに返すからと言つたにやあ言ひましたけれども、何、少姐さんは返して貰ふおつもりぢやございませんのに、漸と今此方ぢやあ思ひ出しました位ですもの。」

「何です、其は、」とやゝ顔の色を直して言つた。口うらを聞けば金子らしい、其ならばと思ふ今も衣兜の中なる、手尖に觸るゝは袂落。修學のためにやがて獨逸に赴かむとする脇屋欽之助は、叔母に今は世になき陸軍少將松島主税の令夫人を持つて、爰に擲つて差支へのない金員あり。以て、餘りに頼效なき虚氣の罪を、此の佳人の前に購ひ得て餘りあるものとしたのである。

問はれてお杉は引取つて、

「些とばかりお金子です。」

欽之助は嬉しさうに、

「ぢやあ私が償はう。否、何うぞ然うさしておくんなさい、大したことならば歸るまで待つて貰はうし、そんなでも無いなら遣つて可いのを持つて居るから。」と思込んで言つた。

「飛んでもない、貴下、」と杉。

お若は知らぬ顔をして莞爾して居る。

此方は熱心に、

「お願ひだから、可いんだから、其でないと實に面目を失する。恁うやつて顔を合して居ても冷汗が出るほど、何だか極が悪いんだ、夜々中見ず知らずが入込んで、何うも變だ。」

「あなた、可いんですよ、私お金子を持つて居ます、何にも遣はないお小遣が澤山あるわ、銀のだの、貴下、紙幣のだの、」といひながら、窮屈さうに坐つて畏まつて居た勝色うらの褄を崩して、膝を横、投げ出したやうに玉の腕を火鉢にかけて、斜に欽之助の面を見た。姿も容も、世に又かほどまでに打解けた、ものを隱さぬ人を信じた、美しい、然も蟠のない言葉はあるまい。

左の衣兜

二十二

意外な言葉に、少年は呆れたやうな目をしながら、今更顔が瞻られた、時に言ふべからざる綺麗な思が此方の胸にも通じたので。

然も遠慮のない調子で、

「何れお詫をする、更めてお禮に來ませうから、相濟まんが何うぞ一番、腕車の世話をしておくんなさい。恁ういふお宅だから帳場にお馴染があるでせう、御近所ならば私が一所に跟いて行く

から、お前さん。」
杉は女の方を一寸見たが、
「あなた何時だとお思ひなさいます。私どもでは何でもありやしませんけれども、世間ぢや夜の二時過ぎでせう。
あれ彼の通、未だ戸外は彼様でございますよ。」
少年は降りしきる雪の氣勢を身に感じて、途中を思ひ出したか又悚とした様子。座に言が途絶えると漂渺たる雪の廣野を隔てて、里ある方に鳴くやうに、胸には描かれて、遙に鷄の聲が聞えるのである。
「お若さん、お泊め申しませう、而して氣を休めてからお歸りなさいまし。
私どもの分際で恁う申しちやあ失禮でございますけれども、何だかあなたはお厄日ででも在らつしやいますやうに存じますわ。
お顏色も未だお悪うございますし、御氣分が何うかでございますが、雪におあたりなすつたのかも知れません。何だか、御大病の前ででもあるやうに、何處か御様子がお寂しくツて、それに悄乎しておいでなさいますよ。
御自分ぢや整然としてお在遊ばすのでございませうけれども、何うやらお心が確ぢや無いやうに

にお見受申します。
お聞き申しますと悪いことばかり、お宅から召したお腕車は破れたでせう、松坂屋の前からのは、間違へて飛んだ處へお連れ申しますし、お時計はなくなります。又お氣にお懸け遊ばすには及びませんが、お託り下さいましたものも失せますね。それも二度、これも二度、重ね〳〵御災難、二度のことは三度とか申します。これから四ツ谷下だりまで、そりや十年お傭つけのやうな確な若いものを二人でも三人でもお跟け申さないでもございませんが、雪や雨の難澁なら、皆が御迷惑を少しづゝ分けて頂いて、貴下のお身體に恙のないやうにされますけれども、何うも御様子が變でございます。お怪我でもあつてはなりません。内へお通ひつけのお客様で、お若さんとどんなに御懇意な方でも、つひぞ此方へは入らつしつた驗のございませんのに、然もあなた、恁ういふ晩、更けてからおいで遊ばしたのも御介抱を申せといふ、成田様のおいひつけででもございませう。
悪いことは申しませんから、お泊んなさいまし、ね、然うなさいまし。
而してお若さんもお炬燵へ、まあ、入らつしやいまし、何ぞお暖なもので縁起直しに貴下一口差上げませうから、
あれさ、何は差置きましても此の雪ぢやありませんかねえ。」

「實は何ういふんだか、今夜の雪は一片でも身體へ當る毎に、毒蟲に螫れるやうな氣がするんです。」

と好個の男兒何の事ぞ、あやかしの絲に纏はれて、備はつた身の品を失ふまで、かゝる寒さに弱つたのであつた。

「ですから然うなさいまし、さあ御安心。お若さん宜うございませう？旦那はあちらで十二時までは受合お休み、夜が明けて爺やとお辻さんが歸つて參りましたら、其は杉が心得ますから、ねえ、お若さん。」

お杉大明神樣と震へつく相談と思の外、お若は空吹く風のやう、耳にもかけない風情で、恍惚して眠さうである。

はツと思ふと少年よりは、お杉がぎツくり、呆氣に取られながら安からぬ顏を、お若は一寸見て笑つて、うつむいて、

「夜が明けると直お歸んなさるんなら厭！」

「然うすりや、」と杉は勢込み、突然上着の衣兜の口を、しつかりとつかまへて、

「恁うして、お引留めなさいましな。」

二十三

寢衣に着換へさしたのであらう、其の上衣と短胴服、などを一か、へに、少し衣紋の亂れた咽喉のあたりへ押つけて、胸に抱いて、時の間に窶の見える頤を深く、俯向いた姿で、奥の方六疊の襖を開けて、お若は悄乎して出て來た。

襖の内には炬燵の裾、屏風の端。

背片手で密とあとをしめて、三疊ばかり暗い處で姿が消えたが、靜々と、十疊の廣室に顯れると、二室越二重の襖、いづれも一枚開けたまゝで、玄關の傍なる其も六疊、長火鉢にくわん〳〵と、大形の臺洋燈がついてるので、あかりは青疊の上を辷つて、お若の冷たさうな、爪先が、其處にもちら〳〵と雪の散るやう、足袋は脱いで居た。

此の灯がさしたので、お若は半身を暗がりに、少し伸上るやうにして透して見ると、火鉢には眞鍮の大藥鑵が懸つて、最一ツ小鍋をかけたまゝ、お杉は行儀よく坐つて、艶々しく結つた圓髷の、其の斑布の櫛をまともに見せて、身動きもせずに假睡をして居る。

差覗いてすつと身を引き、しばらく物音もさせなかつたが、やがてばつたり、抱へてたものを疊に落して、殄々として忍泣の聲がした。

しばらくすると、密と又其の着物を取り上げて、一ツづゝ壁の際なる衣桁の亙。
お若は力なげに洋袴をかけ、短胴服をかけて、それから上衣を引かけたが、持つたまゝ手を放さず、じつと立つて、再び密と爪立つやうにして、間を隔つて恰も草双紙の挿繪を見るやう、衣の縞も見えて森閑と眠つて居る姿を覗くが如くにして、立戻つて、再三衣桁にかけた上衣の衣兜。
然も其の左の方を、確乎と取つてお若は思はず、
「あゝ、厭だつていふんだもの、」と絶入るやうに獨言をした。あはれ恁うして、幾久しく契を籠めよと、杉が、恁うして幾久しく契を籠めよと！
お若は我を忘れたやうに、じつとおさへたまゝ身を震はして、しがみつくやうにするトタンに、かちりと音して、爪先へ冷りと中り。總身に針を刺されたやうに慄と寒氣を覺えたのを、唯見ると一挺の剃刀であつた。
「まあ、恐いことねえ。」
猶且つびつしより濡れながら袂の端に觸れたのは、包んで五助が方へあつらへた時のまゝなる、見覺えのある反故である。
お若はわな〳〵と身を震はしたが、左手に取つてじつと見る間に、面の色が颯と變つた。
「わッ。」

といふと研屋の五助、喚いて、むツくと彈ね起きる。炬燵の向うにころりとせ、貧乏德利を枕にして寢そべつて居た鏡研の作平、もやひ蒲團を彈反されて寢惚聲で、
「何ぢやい、騷々しい。」
五助は服はだけに大の字形の名殘を見せて、墓のやうな及腰、顏を突出して目を睜つて、障子越に紅梅屋敷の方を瞻めながら、がた〳〵がた〳〵、
「大變だ、作平さん、大變だ、ひ、ひ、人殺し！」
「貧乏神が拔け出す前兆か、恐しく怯されるの、しつかりさつし〳〵。」といひながら、餘り血相のけたゝましさに、捨て置かれず之も起きる。枕頭には大皿に刺身のつま、猪口やら箸やら亂暴で。
「いや、お前しつかりしてくれ、大變だ、何うも恐しい祟だぜ、一方ならねえ執念だ。」

化粧の名殘

二十四

「とう〳〵お前、旗本の遊女が惚れた男の血筋を、一人紅梅屋敷へ引込んだ、同一理窟で、お若

さんが、さ、さ、先刻取り上げられた剃刀で矢張、お前、とても身分違ひで思が叶はぬとッて、其、其の男を殺すといふのだい。今行水を遣つてら、」

「何をいはつしやる、はゝゝはゝ、風邪を引くぞ、うむ、夢ぢやわ〳〵。」

「はて、しかし夢か、」とぼんやりして腕を組んだが、

「待てよ、恁うだによつてと、誰か先刻此處の前へ來て二上屋の寮を聞いたものはねえか。」

「おゝ、」

作平も膝を叩いた。

「然ういやあある。お前は醉つぱらつてぐう〳〵ぢや、何かまじ〳〵として私あ寐られん、一時半ばかり前に、恐しく風が吹いた中で、確に聞いた、然も少い男の聲よ。」

「其だ〳〵、正しく其だ、や、飛んだこッた。

お前、何でも遊女に剃刀を授かつて、お若さんが、殺してしまふと、身だしなみのためか、行水を、お前、行水ッて湯殿でお前、小桶に沸ざましの藥鑵の湯を打ちまけて、お前、惜氣もなく、肌を脫ぐと、懷にあつた剃刀を啣へたと思ひねえ。硝子戸の外から覗いてた、私が方を仰向いての、仰向くと其拍子に、がッくり拔けた島田の根を、邪慳に引つかんだ、顏色ッたら、先刻見た幽靈にそッくりだあ、きやあッともいはうぢやあねえか、だからお前、疾く行つて留めねえと。」

「そして男を殺すとでもいうたかい、」

「いや、私が夢はお前の夢、えゝ、小じれッてえ。何でもお前が紅梅屋敷を教へたからだ。今思やうつゝだらうか、晩方然も今日研立の、お若さんの剃刀を取られたから、氣になつて、氣になつて堪るめえ。

處へ夜が更けて、尋ねて行くものがあるから、をかしいぜ、此奴、最屓の田之助に怪我でもあつちやあならねえと、直ぐにあとをつけて行くつもりだつけ、例の臆病だから叶はねえ、不性をいふお前を、引張出して、夢にも二人づれよ。」

「やれ〳〵御苦勞千萬。」

「それから戸外へ出ると雪はもう留んで居た、寮の前へ行くとひつそりかんよ。人騷せなと、思つたけれど、あやまる分と、聲をかけて、戸を叩いたけれど返事がねえ。

いよ〳〵變だと思ふから大聲で喚いてドン〳〵やつたが、成るほど夢か。叩くと音がしねえ、思ふやうに聲が出ねえ。我ながら向う河岸の渡船を呼んでるやうだから、構はず開けて入らうとしたが掛金がつちりだ。

何處か開く處があるめえかと、ぐる〳〵寮の周圍を廻る內に、湯殿の窓へあかりがさすわ。

はて變だわえ、今時分と、其處へ行つて覗いた時、お若さんが寢亂れ姿で藥鑵を提げて出て來

たあ。唯先づ安心をして凄いやうに美しい顔を見ると、目を泣腫らして居ます、ね。何うしたかと思ふ内に、鹿の子の見覺えある扱一ツ、背後へ縮緬の羽織を引振つて脱いでな、褄を取つて流へ出て、其の藥鑵の湯を打ちまけると、むつと恁う霧のやうに湯氣が立つたい、小棚から石鹼を出して手拭を突込んで、うつむけになつて顔を洗ふのだ。ぐら〳〵とお前その時から島田の根がぬけて居たらうぢやねえか。

それですつぱりと顔を拭いてよ、其處で又一安心をさせながら、何と、それから丸々ツちい兩肌を脱いだんだ、それだけでも悚とするのに、考へて見りや些と變だけれど、胸の處に剃刀が、其がお前、

（五助さん、これでせう、）と晩方遊女が遣つた圖にそつくりだ。はつと思ふトタンに背向になつて仰向けに、然うよ、上口の方にかゝつた、姿見を見た。すると髪がざら〳〵と崩れたといふもんだ、姿見に映つた顔だぜ、其の顔が又遊女其のまゝだから、キヤツといつたい。」

二十五

然れば五助が夢に見たのは、欽之助が不思議の因緣で、雪の夜に、お若が紅梅の寮に宿つたについての、委しい順序ではなく、遊女の靈が、見棄てられた其の戀人の血筋の者を、二上屋の女

に殺させると叫んだのも、覺際にフト刺戟された想像に留まつたのであるが、然し其は不幸にも事實であつた。宵におびやかされた名殘とばかり、左までには思はなかつた作平も、正しく少い聲の男に、寮の道を教へたので、すても置かず、兎も角もと大急ぎで、出掛ける拍子に、棒を小腋に引きそばめた臆病ものの可笑さよ。

戸外へ出ると、最う先刻から雪の降る底に雲の行交ふ中に、薄く隱れ、鮮かに顯れて居たのがすつかり月の夜に變つた。火の番の最後の鐵棒遠く響いて廓の春の有明也。

出合頭に人が一人通つたので、矢庭に棒を突立てたけれども、何、それは怪しいものにあらず、「お早うがすな。」と澄して土手の方へ行つた。

積んだ薪の小口さへ、雪まじりに見える角の炭屋の路地を入ると、幽にそれかと思ふ足あとが、心ばかり飛々に凹んで居るので、先づ顔を見合せながら進んで門口へ行くと、内は寂として居た。

これさへ夢の如きに、胸を轟かせながら、試みに叩いたが、小塚原あたりでは狐の聲とや怪しまむと思はるゝまで、如月の雪の殘月に、カン〳〵と響いたけれども、返事がない。

猶豫ならず、庭の袖垣を左に見て、勝手口を過ぎて大廻りに植込の中を潛ると、向うにきらきら水銀の流るゝばかり、湯殿の窓が雪の中に見えると思ふと、前の溝と覺しきに、むら〳〵と薄く凡そ人の脊丈ばかり湯氣が立つて居た。

之にぎよッとして五助、作平、湯殿の下へ驅けつけた時はもう喘いで居た。逡巡をする五助に入交つて作平、突然手を懸けると、誰が忘れたか戸締がないので、硝子窓をあけて跨いで入ると、雪あかりの上、月がさすので、明かに見えた眞鍮の大藥鑵。蓋と別々になつて、うつむけに引くりかへつて、濡手拭を桶の中、湯は澤山にはなかつたと思はれ、乾き切つて霜のやうな流が、網を投げた形にびつしよりであつた。

上口から躍込むと、あしのあとが、板の間の濡れたのを踏んで、肝を冷しながら、明を目的に驅けつけると、洋燈は少し暗くしてあつたが、お杉は端然坐つたまゝ、其の髷、其の櫛、其の姿で、小鍋をかけたまゝ凍つたものの如し。

但何時の間にか、先刻欽之助が脱いだまゝで置いて寢に行つた、結城の半纏を被せかけてあつた。とお杉は之をいつて今もさめ〴〵と泣くのである。

五助、作平は左右より、焦つて二ツ三ツ背中をくらはすと、杉はアッといつて、我に返ると同時に、

「おいらんが、遊女が、」と切なさうにいつた。

半纏はお若が心優しく、いまはの際にも勦つて其時かけて行つたのであらう。

後にお杉はうつゝながら、お若が目前に湯を取りに來たことも、然もまくり手して重さうに持

つて湯殿の方へ行つたことも、知つて居たが、之よりさき朦朧として雪ぢらしの部屋着を被た、品の可い、脊の高い、見馴れぬ遊女が、寮の内を、彼方此方、幾度となくお若の身に前後して、お杉が自分で立たうとすると、屹と睨まれて身動きが出來ないのであつたと謂ふ。

とかういふべき暇あらず、我に復るとお杉も太くお若の身を憂慮つて居たので、飛立つやうにして三人奥の室へ飛込んだが、噫。

既に遲矣、雪の姿も、紅梅も、狼藉として韓紅。

狂氣の如くお杉が抱き上げた時、お若は未だ呼吸があつたが、血の滴る剃刀を握つたまゝ、

「濟みませんね、濟みませんね。」と二聲いつたばかり、これは唯皮を切つた位であつたけれども曉を待たず。

男は深疵だつたけれども氣が確で、いま驅つけた者を見ると、

「お前方、助けておくれ、大事な體だ。」

といつたので、五助作平、腰を拔いた。

此の事實は、翌早朝、金杉の方から裏へ廻つて、寮の木戸へつけて、同一枕に死骸を引取つて行つた馬車と共に能く祕密が守られた。

しかし馬車で乘つけたのは、昨夜伊豫紋へ、少將の夫人の使をした、橘といふ女教師と、一名

の醫學士であつた。

其の診察に因つて救ふべからずと決した時、次の室に畏つて居た、二上屋藤三郎卽ちお若の養父から捧げられたお若の遺書がある。

橘は取つて披見した後に、枕頭に進んで、聲を曇らせながら判然と讀んで聞かせた。

此の意味は、人の想像と些も違はぬ。

爾時まで殘念だ、と呼吸の下でいつて、いひ續けて、時々齒嚙をして居た少年は、耳を澄して、聞き果てると、しばらくうつとりして、早や死の色の宿つたる蒼白な面を和げながら、手眞似をすること三度ばかり。

醫學士が頷いたので、橘が筆をあてがふと、纔に枕を擡げ、天地紅の半切に、薄墨のあはれ水莖の蹟、にじり書の端に、わかゝとある上へ、少し大きく、佳い手で脇屋欽之助つま、と記して安かに目を瞑つた。

一座肅然。

作平は啜泣をしながら、

「おめでてえな。」

五助が握拳を膝に置いて、

「お若さん、喜びねえ。」

蠅を憎む記

上

いたづら爲たるものは金坊である。初めは稗蒔の稗の、月代のやうに素直に細く伸びた葉尖を、フッ〳〵と吹いたり、蔦たけた顏を斜めにして、金魚鉢の金魚の目を、左から、又右の方から覗めたり。

やがて出窓の管簾を半ば捲いた下で、腹ンばひに成つたが、午飯の濟んだ後で眠氣がさして、くるりと一ッ廻つて、姉の針箱の方を頭にすると、足を投げて仰向になつた。

目は、ぱつちりと睜いて居ながら、敢て見るともなく針箱の中に可愛らしい惡戯な手を入れたが、何を搜すでもなく、指に當つたのは、ふつくりした絲卷であつた。

之を指の尖で撮んで、引くり返して、引出の中で立てて見た。

然うすると、弟が柔かな足で、くる〳〵遊び廻る座敷であるから、萬一の過失あらせまい爲、注意深い、優しい姉の、今しがた店の商賣に一寸部屋を離れるにも、心して深く引出に入れて置いた、剪刀が一所になつて入つて居たので、絲卷の動くに連れて、夫に結へた小さな鈴が、ちりん と幽に云ふから、幼い耳に何か囁かれたかと、弟は丸々ッこい頰に微笑んで、頷いて鳴した。

鳴るのが聞えるのを嬉しがつて、果は烈しく獨樂のやう、絲卷はコトコトとはずんで、指をはなれて引出の一方へ倒れると、鈴は又一つチリンと鳴つた。小な胸には、大切なものを落したやうに、大袈裟にハッとしたが、ふと心着くと、絹絲の端が有るか無きかに、指に挾つて殘つて居たので、うかゞひ、うかゞひ、密と引くと、絲卷は、ひらりと面を返して、絲はする〳〵と手繰られる。手繰りながら、斜に、寢轉んだ上へ引き〳〵、頭をめぐらして、此方へ寢返を打つと、絲は左の手首から胸へかゝつて、宙に中だるみ爲て、目前へ來たが、最う眠いから何の色とも知らず。

自ら其を結んだとも覺えぬに、宛然絲を環にしたやうな、萌黃の圓いのが、ちら〳〵一ッ見え出したが、見る〳〵紅が交つて、廻ると紫になつて、颯と碎け、三ッに成つたと見る內、八ッになり、六ッになり、散々にちらめいて、忽ち算無く、其の紅となく、紫となく、綠となく、あらゆる色が入亂れて、上になり、下になり、右へ飛ぶかと思ふと左へ躍つて、前後に飜り、また飜つて、瞬をする間も止まぬ。

此の輕いものを戰がすほどの風もない、夏の日盛の物靜けさ、其の癖、こんな時は譬ひ耳を押つけて聞いても、金魚の鰭の、水を搔く音さへせぬのである。

798
167

さればこそ烈しく聞えたれ、此の兒が何時も身震をする蠅の羽音。

唯同時に、劣等な蟲は、ぽつりと點になつて目を衝と遮つたので、思はず足を縮めると、直に搔き消すが如く、部屋の片隅に失せたが、息つく隙もなう、流れて來て、美しい眉の上。

留まると、折屈みのある毛だらけの、彼の恐るべき脚は、一ツ一ツ蠢き始めて、睫毛を數へるが如くにするので、豫て優しい姉の手に育てられて、然う爲た事のない眉根を寄せた。

堪へ難い不快にも、餘り眠かつたから手で拂ふことも爲ず、顏を横にすると、蠅は辷つて、頰の邊を下から上へ攀ぢむと爲る。

這ふ時の脚には、一種の粘糊が有るから、氣だるいのを推して拂くは可いが、惡く掌にでも潰れたら何うせう。

下

其時まで未だ些とは張の有つた目を、半ば閉ぢて、がつくりと仰向くと、之がため蠅は頰ぺたを嘗めて居た嘴から絲を引いて、ぶう〳〵と鳴いて飛上つたが、聲も遠くには退かず。

瞬く間に翼を組んで、黑點先刻よりも稍大きく、二つが一つになつて、衝と、細眉に留まると、忽ちほぐれて、びく〳〵と、ずり退いたが、入交つたやうに覺えて、頰の上で再び一ツ一ツに分

れた。

其の都度ヒヤリとして、針の尖で突くと思ふばかりの液體を、其處此處滴らすから、幽に覺えて居る種痘の時を、胸を衝くが如くに思ひ起して、毒を射されるかと舌が硬ばつたのである。

まあ、何處から襲つて來たのであらうと考へると、……其では無いか。

店へ來る客の中に、過般、眞桑瓜を丸ごと嚙りながら入つた田舍者と、それから歸りがけに酒反吐をついた紳士があつた。其の事を謂ふ毎に、姉は面を蔽ふ習慣、大方其の者等の身體から姉の顏を掠めて、暖簾を潛つて、部屋まで飛込んで來たのであらう、……其よ、謂ひやうのない厭な臭氣がするから。

と思ふ、愈々胸さきが苦しくなつた。其に今がつくりと仰向いてから、天窓も重く、耳もぼつとして、氣が遠くなつて行く。——

焦れるけれども手はだるし、足はなへたり、身動きも出來ぬ切なさ。

何を！これしきの蟲と、苛つて、恰も轉つて來て、下まぶちの、まつげを侵さうとするのを、現にも睨めつける氣で、屹と瞳を据ゑると、いかに、普通見馴れた者とは大いに異り、一ツは鐵よりも固さうな、而して先の尖つた奇なる烏帽子を頭に頂き、一ツは灰色の大紋ついた素袍を着て、いづれも蟲の顏でない。紳士と、件の田舍漢で、外道面と、鬼の面。——醜惡絶類である。

798
167

「あ、」と云つたが其の聲咽喉に沈み、しやにむに起き上らうとする途端に、トンと音が、身體中に響き渡つて、胸に留つた別に他の一疋の大蠅が有つた。小兒は粉米の團子の固くなつたのが、鎧甲を纏うて、上に跨つたやうに考へたのである。

疊の左右に、はら〳〵と音するは、我を襲ふ三疋の外なるが、なほ、十ばかり。

其の或者は、高波のやうに飛び、或者は網を投げるやうに驅け、衝と行き、颯と走つて、恣に姉の留守の部屋を暴すので、惱み煩ふものは單小兒ばかりではない。

小簞笥の上に飾つた箱の中の京人形は、蠅が一齊にばら〳〵と打撞るごとに、硝子越ながら、其の鈴のやうな美しい目を塞いだ。……柱かけの花活にしをらしく咲いた姫百合は、羽の生えた蛆が來て、こびりつく毎に、懈ゆげにも、あはれ、花片ををのゝかして、毛一筋動かす風もないのに、弱々と頭を掉つた。弟は早や絶入るばかり。

時に、壁の蔭の、晝も薄暗い、香の薫のする尊い御厨子の中に、晃然と輝いたのは、妙見宮の御手の劍であつた。

一疋、ハツと飛退つたが、ぶつ〳〵といふ調子で、

「お刀の汚れ、お刀の汚れ。」と鳴いた。

また氣勢がして、佛壇の扉細目に仄見え給ふ端嚴微妙の御顏。

蠅は内々に、

「觀音樣、お手が汚れます。」

「けがれ不淨のものでござい。」

「不淨のものでござい。」

と呟きながら、さすがに恐れて靜まつた。が、暫時して一個厭な聲で、

「はゝゝゝはゝ、いや、恁又ものも汚うなると、手がつけられぬから恐るゝことなし。はゝはゝこら、何うぢやい。」と、ひよいと躍つた。

トコトン〳〵、はらり〳〵、くるりと廻り、ぶんと飛んで、座は唯蠅で蔽はれて、果は夥しい哉渦く中に、幼兒は息が留つた。

恰も可し、中形の浴衣、繻子の帶、雪の如き手に團扇を提げて、店口の暖簾を分け、月の眉、先づ差覗いて、

「おゝ、大變な蠅だ。」

と姉が、しなやかに手を振つて、顏に觸られまいと、俯向きながら、煽ぎ消すやうに、ヒラヒラと拂ふと、そよ〳〵と起る風の筋は、佛の御加護、おのづから、魔を退くる法に合つて、蠅の同勢は漂ひ流れ、泳ぐが如くに、むら〳〵と散つた。

座に着いて、針箱の引出から、一絲其の色紅なるが、幼兒の胸にかゝつて居るのを見て、
「いたづらッ兒ねえ。」と莞爾、寢顏を優しく睨むと、苺が露に艶かなるまで、朱の唇に蠅が二つ。
「酷いこと！」と柳眉逆立ち、心激して團扇に及ばず、袂の尖で、向うへ拂ふと、怪しい蟲の消えた後を、姉は袖口を嚙んで拭いて遣りながら、同じ針箱の引出から、二つ折、笹色の紅の板。
其れを紅差指で弟の唇に。
一寸四邊を眴して又唇に。
花の薫が馥郁として、金坊は淸々して、はッと我に返つた。あゝ、姉が居なければ、少くとも煩つたらう。

798
167

東京府規格規格外許可已資紙規第一七三號

鏡花全集 第六卷
會費 貳圓六拾錢 (停)

昭和十六年十一月一日 印刷
昭和十六年十一月十日 發行

著作者 泉鏡太郎
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩波茂雄
東京市下谷區二長町一番地
印刷者 井上源之丞
東京市下谷區二長町一番地
印刷所 凸版印刷株式會社
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所 岩波書店
電話九段(33)一八七番(4)
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

(寺島製本)

落丁・亂丁等不完全な品があるしましたら直接お申出下さいお取替致すます

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

798
167

798
167